

SONRISA

# そんりさ

Vol.145



エクアドル・コタカチの先住民族女性

「そんりさ」「微笑み」を意味します。レコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

アフリカ系パラグアイ人の今

- |    |                         |    |           |
|----|-------------------------|----|-----------|
| 02 | 知られざるアフリカ系パラグアイ人        | …… | 横山葉子      |
| 07 | エクアドル・インタグ鉱山開発問題        | …… | 一井リツ子     |
| 07 | 鉱山開発に抵抗するアンデスの人々        | …… | 翻訳ワークショップ |
| 14 | 「ジョローナ」 CLIJAL活動から      | …… | 伊香祝子      |
| 15 | ラ米百景 「パプロ・ネルーダの記憶」      | …… | 伊高浩昭      |
| 16 | 音楽三昧♪「ペルー音楽との出会いを語ってみる」 | …… | 水口良樹      |
| 18 | メキシコ食巡り「トルティーヤの炒め煮」     | …… | ミゲル・アクーニャ |
| 19 | ニュースクリップ                | …… | サザエ       |

# 知られざるアフリカ系パラグアイ人 Afro Paraguayanの存在

横山葉子

南米中部にあるパラグアイ共和国の中には現在、約8千人（2007年人口統計）ほどのアフリカ系パラグアイ人（Afro Paraguayan/Pardos）<sup>1</sup>がいます。1万人にも達しない小さな人口のため、これまでの一般的な中南米諸国のAfro-Latinoの統計から見落とされがちになってきましたが、パラグアイには、確かに彼らの生活が存在しています。この機会を通じて、皆さま方にそのアフリカ系パラグアイ人のお話をご紹介します。今回ご紹介する内容は、2007年から2009年までの調査に基づいていることをご了承ください。

## アフリカ系パラグアイ人

現在、アフリカ系パラグアイ人人口の89.5%(Diaz 2010)が首都アスンシオンの東北コルディジェラ県エンボスカーダ市周辺一帯で暮らしています。パラグアイを含む南米諸国が欧州の植民地下であった時代に、三角貿易<sup>2</sup>でブラジルに送られてきた黒人労働者が奴隷解放を求めて、ブラジルから辿り着いた町、それがエンボスカーダでした。ところが皮肉なことに、自由を求めて逃れて来たエンボスカーダでも新たな奴隷制度が待っていた、という歴史があります。

## なぜエンボスカーダへ送られてきたのか？

エンボスカーダ周辺には、ヨーロッパ建築に利用される美しい石（マーブルストーン）の石山があることから、そこで石を掘る労働者が必要だったので。そして、その美しい石はスペインをはじめ多くのヨーロッパ諸国へ運ばれ、美しい建築物となりました。ヨーロッパ諸国を旅すると石畳の道やあらゆる素敵な建築物にそのような石材が使われている光景を目にします。その裏側に、遠いアフリカから労働力として送られてきた黒人奴隷労働者の歴

史がしみ込んでいることに気づかず、多くの人は美しい景色をきれいな写真におさめることでしょう。



マーブルストーン

## インフラが進まなかった エンボスカーダの歴史

私が海外青年協力隊（JOCV）の村落開発普及員（2007-2009）として派遣されたのが、そのPardosの歴史が残されているエンボスカーダでした。首都アスンシオンから僅か40kmほどの首都近郊でありながら、極端に発展が遅れていました。国内の近代化がどんどん進む中、エンボスカーダの町が市になり国道が自分たちの地域を通るようになってわずか5年ほどでしたが、アスンシオン側の隣町リンピオまではずいぶん昔から国道（Ruta3）が通っており、同時に、ブラジル側の隣町アロヨス・イ・エステロスまでもかなり前からその国道が通っていたのです。両サイドの町までは国道のインフラ整備が進んだにも関わらず、このエンボスカーダだけが外部へのアクセスを不要とされた、置き去りにされた地域だったようです。私が赴任した直後、もう一つ驚いたことは、エンボスカーダ地域の電話番号の桁数が周りの市街地の桁数より極端に数が少ないことでした。そのため、この地域だけが、ネット回線にアクセスすることができずインターネットの普及も大幅に遅れていました。

## 自己のアイデンティティ

エンボスカーダ市の周辺をいくつかの地域が取り囲んでいます。その一つ、ミナとよばれる地域はマールストーンが掘り起こされる石山が位置する場所です。その地域の住民の過半数は肌の色が黒いのですが、それら人々の多くは自分たちをPardosと呼びません。子どもや親戚が少しでも黒人外の人種と混血するように望み、自分たちの血が黒人ルーツであることを薄めていこうと望む人々が多いのです（Lipski 2008）。私自身がコミュニティ活動に関わる2年間、「この人たちはなぜこんなにも自己のアイデンティティを持とうとしないのだろう」と疑問に思い続けていました。同時に、彼らの自己アイデンティティの乏しさと共存していくうちに、その自己アイデンティティ「彼らが自分自身をどう観ているのか？」が、彼らが直面する「貧困の周縁化」の要因に関わっているのではないかと関心を持ち始めました。そして、JOCV活動終了後、その疑問と共に大学院に進学し、エンボスカーダのケースをもとに「貧困の周縁化」を研究していく中で、とても関心深い歴史の一部を発見したのです。

## 独立後、パラグアイ国民によって つくられた政策

スペインからの独立（1811年）後、白人の力を制御しようと試みたパラグアイは、国をあげて「混血人種を増やすためのある政策」をつくりました。パラグアイ史の「El Supremo」で知られているフランシア博士の独裁下時代（1814年～1840年）、パラグアイ国内での白人同士の結婚を禁止した時代があったのです（Lipski 2008）。つまり、多数派であるグアラニー民族が白人と結婚することは歓迎、アフリカ系と白人系の結婚、グアラニー民族同士の結婚も受理、白人同士の結婚を国内で受理しないことで多くの白人家系を国から自然に退去させる方向へ導いた、という政策です。しかし、その政策のどこにもAfro Paraguayanであるアフリカ系パラグアイ人同士、黒人とムラート（Pardosを生み出す結婚）、黒人と他の少数民族との結婚について触れられてい

ませんでした。そして、この政策により白人ベースの混血グループが増加し、やがて、白人とグアラニー民族の混血（メスティソ）が政権を握る時代を迎えました。その結果、エンボスカーダにもそれらの人種的パワーを持つ人々が移り住み、市街地の中心地を自分たちが所有しながら街をつくっていったのです。今でも、市役所やカトリック教会を囲む中心地はそれらの人々が時価の高い土地を握りしめています。

## マイノリティ（少数派民族）の人権保護

パラグアイは、「民族の尊重、少数民族の人権保護」に力を入れている国と言われています。グアラニー民族をルーツに持つ人々を増やす政策により、現地の多数派民族であるグアラニー民族は、それらの歴史を越えて尊重されてきました。多くの政治家も大富豪も世代をさかのぼるとグアラニー民族の祖先につながる、という人種づくりのメカニズムは、親族思いの人々にとって自ら「民族への尊重と敬意につながりました。しかし、グアラニー民族以外の少数民族の人権はどうなるのか？」という疑問が上がり、その後、それらの少数民族に対する人権保護の動きが活発となり、複数の国際機関がリサーチの上、国際レベルでマイノリティの人権を守るための警告が出され、まだまだ課題はあるものの多方向での改善に向かっていきます。

しかし、アフリカ系パラグアイ人はそのマイノリティの中にも一マイノリティグループとして存在していません。例えばPardosの人口と比較して、それより小さな人口の民族さえも「マイノリティ」としてリストに上がっているのであれば、小規模人口は数に入らない理由にはならないはずです。

## なぜアフリカ系民族だけが少数民族リストから抜け落ちてしまうのでしょうか？

アフリカ系パラグアイ人が少数派からリストから抜け落ちてしまう大きな理由の一つに、彼ら自身が自分たちを「アフリカ系パラグアイ人/Afro Paraguayo / Pardos」と呼ばれたくないことがあげら

れます (Diaz 2010)。「あなたはAfro Paraguayo/Pardosですか?」という問いに、「私はムラートです」と答える人が半数なのです。確かに、Pardosそのものがムラート混血なので、ムラート血族であることは間違いありません。また、ブラジルから移住した純粋なアフロ-ラティーノも自分たちのことを「ブラジル人だ」と呼び続けた時代があり、今でも、エンボスカーダではブラジル文化であるカーニバルが町の行事=写真=となっています。

つまり、黒人ベースの混血であるPardosやパラグアイ国内に住むアフロ-ラティーノは自分たちを



内職で僅かの現金収入を稼ぐ女性の手



カーニバルに参加する若者たち

「Afro-Paraguayan」と呼ばないこと、それが、彼ら自身の存在を消してしまう大きな要因の一つとなったのです。そして、保護されるべき政策から抜け落ちてしまう結果を生み出してしまっています。

## 貧困から抜け出せない厳しい生活

現状として、マイノリティとしても守られない、政府からも置き去りにされがちな、パラグアイ国内のアフロ・ラティーノは、他のマイノリティに与えられている優遇措置（例えば、基礎教育、保健医療の特別強化支援）がとられないまま、社会の保障制度から守られずにあらゆる方面で困窮した状態です。

エンボスカーダを取り囲む地域がその代表的なケースでした。多少栄えているのは市の中心地のみで、エンボスカーダをとり囲む諸地域の村に入ると、識字率は極端に低く、特に30代以上の女性が5人集まると2人程は自分の名前がやっとかける程

度、時には、5人のうち名前すら書けない人が1人います。数重ねるワークを通じ、横断的に識字率をリサーチした結果、30歳以上女性の場合、約4割は非識字者でした。これは、「9割以上の識字率」と掲げている国のデータを比較すると、彼女たちがデータベースの分母に入っていないことがうかがえ、いかに置き去りにされている地域であるかが理解できます。

健康面もひどい状況です。私が村落普及員としてコミュニティ内で活動をしていた2008年、保健師隊員との連携で3か所の村をターゲットに健康診断を行った結果、12歳以下の子どもの5人に4人が栄養不足でした。わずかに40km離れた首都の同世代には多くの肥満児がいるというのは対照的な現実です。

雇用不足問題は特に深刻です。貧困の底辺にあるエンボスカーダ地域全般では、コミュニティ内に日々の生活を守るような仕事はもちろんありません。特に、アフリカ系パラグアイ人の多くは、奴隷解放後も植民地化時代と同様、石山を掘り続け、現在も、その僅かな日雇い賃金で生活している人がほとんどです。石流通ビジネスのオーナーが植民地時代のスペイン人からパラグアイの富裕層に替わっただけで、彼らが抱える過労と低賃金の労働条件は酷なものです。そんな中、それらの人々は、自分の人生の逆転劇として「隣国への出稼ぎ労働」に夢と希望を抱いています。アルゼンチンやブラジルまでの交通費と仕事あっせん業（いわゆるブローカー）への支払い額を貯めて、とにかく外貨を稼ぎ、貧困からの脱出を夢見ています。しかし現実、夢に見る

通りではなく、それらの移住労働者の多くは隣国でも過酷な労働、約束通りに支払われない賃金等を経験しています。

## 若者の希望

私が2年間のコミュニティ開発活動「退学者のための生き直し教育（Lifelong Learning Programme）」に取り組む中で、とても興味深いデータが見えたことがありました。それはユニークな「若者の希望の構築プロセス」です。エンボスカードの若年層（15-35歳）を対象に、あるワークを通じて、自分の10年後の夢を描き、その希望の人生を手に入れるための手段を描いてもらったことがあります（写真⑤参照）。そのワークを通じて、私は本当に言葉を失う思いでした。驚いたことに、そのほとんどの若者たちが国外への希望だけを見出していたのです。

希望の構築ワークの様子



まず、最初のワークで、参加者の多くは、「将来、家畜を増やしたい」、「親に家を建ててあげたい」、「幸せな結婚をしたい」等の夢を描きました。そして、その夢に辿り着くまでのプロセスづくりをしていくと、ほとんどの人の夢の実現のための働く場は、隣国のアルゼンチン、ブラジルなのです。その理由に、「うちの叔父がそのように家畜を増やしたから」、「近所の家が大きくなったのは出稼ぎ家族がいるから」と、とても具体的です。つまり、これらの若者のRole Model（お手本となる人物

像）となっている人々が「出稼ぎによって人生の逆転劇を起こした人」ということです。

## 出稼ぎ思考を後押ししている教育現場…

もう一つ、'出稼ぎ希望の若者を隣国へ送り出してしまう大きな事実'に気がつきました。

それは、若年層を対象としている教育省生涯局プログラムのカリキュラム内容が出稼ぎを後押ししていることです。男性対象カリキュラムは「水道工事」「電気配線」「内装工事」、女性対象カリキュラムは「家政（ケアワーカーに必要な内容）」が中心です。そのどのスキルも隣国の出稼ぎ労働需要が高いものばかりです。いわゆる「パソコン技術」や「会計」等のコース受講条件には、中等教育レベル終了（または同等の資格）が必要とされ、そのレベルまで達していない多くのアフリカ系パラグアイ人には手が届かない現状があります。そして、先ほどの人種パワー関係が働き、人気のあるそれらのコースは社会階級の高い白人系混血グループが優先してコネを得ることによって、学習の機会を手に入れてしまうのです。

このカリキュラム、そして、パラグアイ国内の市民間で新たに作り出されたパワー関係の中で実施される教育環境の場、これをパウロフレイレの銀行型教育（Banking Education）<sup>3</sup>で理解してみると、「上から下に働く力による教育は必ず、弱者を作り出し、そして、その弱者はより弱者を作り出すというサイクル」を生み出しています。白人人口の減少への働きかけは成果を収めることができたものの、白人の入らない人種は弱者となってしまう、その中でも一番の弱者はその存在すら抜け落ちている'黒人混血'のグループということです。

## 貧困の周縁化

パラグアイは、国内の公用語にスペイン語とグアラニー語を取り入れ、二言語教育を実施し、先住民族への敬意が高いことで名高い国です。ところが、

このように人々に知られないまま抜け落ちている、置き去りにされている人々がいるのです。

独立後のポストコロニアル史の中で、彼ら自身によってつくられていったパラグアイ国内の人種間パワー関係が生まれ、社会的、経済的、政治的な多方向のパワー関係へと繋がっていきました。もちろん、植民地解放後も、経済開発や社会開発の側面（貿易・流通・教育政策等）で植民地開拓者（スペイン）とのパワー関係が続いている事実は避けられません。しかし、アフリカ系パラグアイ人が極度の貧困層から抜け出せない要因の一つである、彼ら自身の「自己アイデンティティの欠乏」が独立後のポストコロニアル時代につくられた「ポストコロニアルアイデンティティ」であること（Yokoyama 2010）は私のリサーチの中での貴重な発見でした。そして、この「ポストコロニアルアイデンティティ」は「他者が彼らをどう見るか」と同時に「自己が自分たちの存在をどのように観るか」ということが大きく影響し合い形成されていること、それを知るのはとても感心深いことでした。

私がPardosの多くを対象とした「生き直し教育プログラム」で見た「貧困の周縁化」は、まさに、ポストコロニアル史の中で、独立を果たしたパラグアイ人自身がその後に取り上げた「新たな貧困の周縁化」の一つです（Yokoyama 2010）。僅か8千人程と言え、置き去りにされてはいけない人々の命、そして、それらの人々が人生の中で手にするべき教育や雇用の機会、ディーセントな生活<sup>4</sup>。この世界中に、このように周縁化された貧困の中で暮らし続ける人々が、人々に知られないまま、まだまだたくさん存在していることでしょう。

限りある中で、十分の説明に至っていないかもしれませんが、私の2年間のJOCV活動を通じて得た現場の声とリソースを基に、その後オランダで研究したテーマの一部をご紹介します。このように、人々に知られていないアフリカ系パラグアイ人の人々の生活を少しでも皆さまに知って頂く機会が持てたことに心から感謝いたします。

\*上記内容はE-Journalで公的に研究発表されているものです。内容引用の際は、必ず引用元を明記ください。また、人物が入っている掲載写真は本人の了承のもと掲載されています。複写掲載等はお控えください。

#### <参考文献>

- Committee on the Elimination of Discrimination against Women (CEDAW) (2005) 'Responses to the list of issues and questions for consideration of the combined third and fourth periodic report and the fifth periodic report: Paraguay': No. 04-52725(E).
- Díaz, N.R. (2010) 'Paraguay Afro-Descendants Affirm Their Identity'. Accessed 19 September 2010 <<http://ipsnews.net/news.asp?idnews=50138>>.
- Freire, P.o (1974) Education for Critical Consciousness. New York: Continuum.
- Freire, P. translated by M.B. Ramos (1970) Pedagogy of the Oppressed. New York: Herder and Herder.
- Lipski, J.M. (2008) 'Afro-Paraguayan Spanish: The Negation of Non-Existence', The Journal of Pan African Studies 2(7): 2-37.
- Yoko Yokoyama (2010) 'Marginalization and Lifelong Learning of Emboscada, Paraguay: Analysis of Adolescent Identity and Aspiration from a Gender Perspective' The Hague, The Netherlands: ISS, Erasmus Rotterdam University

<sup>1</sup> Afro-Paraguayanの多くはパルドス[Pardos、黒人と(黒人と白人の)混血]と呼ばれています。

<sup>2</sup> 3つの国地域が関係している貿易構造のこと。植民地化時代、労働力をアフリカから中南米へ送り、資源を北へ貿易する構造で実施された「奴隷貿易」として知られている。

<sup>3</sup> バウロフレイレ（1921-1997）が教育における一般的な形態を批判するために用いた用語。教師-生徒関係が相互発信的な「対話」でなく、教師による一歩通行(上から下)の抑圧行為に基づいてなりたっている教育のこと。

<sup>4</sup> 保険や年金、医療制度などの社会保障に守られ安定すること

# エクアドル・インタグ鉱山開発問題 一井リツ子

2013年2月、私たちはエクアドルを旅した。エクアドルは赤道直下に位置し、アマゾン河、アンデス山脈、海岸地帯、ガラパゴス島を含む様々な風土から貴重な生態系を生む。3万5千種に及ぶ植物種、絶滅危惧種の動物も多く生息し、13の文化が形成され、その多様性は世界一ともいわれている。九州と本州を合わせたような小さな国土に、地球上の全生物種の10%が集中しているというすばらしい土地だ。

しかしすでに現在にいたる自然破壊のためすでにその9割は失われ、残りは1割。それにもかかわらず開発による環境破壊が大きな問題になっている。

アマゾン一帯では、シェブロン（旧テキサコ）というアメリカの石油企業による廃棄汚染で先住民民族コファンをはじめ3万人が環境破壊、健康被害に苦しみ十数年にわたり訴訟を続けていて、ここでは土壌・水質汚染によるガン患者など2千人の死者を超えるチェルノブイリ級の被害がでていいる。

このような状況を前に、3期目を務めるラファエル・コレア政権（2/17の大統領選で約57%を獲得し当選）は、これまで環境保護政策をとっていた。「ヤスニITTイニシアティブ」は生態系の破壊、膨大なCO<sub>2</sub>の排出が懸念されるヤスニ国立公園に埋蔵される石油を開発しない代わりに、想定される利益の半分の資金提供を世界に呼びかけるといったもので、その斬新な環境政策に期待が寄せられてきた。しかし資金調達が頭打ちとなり、主張に変化が見られだした。

ついに2013年8月15日、コレア大統領はヤスニITT提案の終焉とその採掘を宣言した。採掘はヤスニ国立公園の1000分の1に過ぎないという言い訳をよそに、首都キトでも抗議行動が高まっている。（最近の世論調査では国民の93%がヤスニITT提案を支持、資金があつまらない場合でも66%が開発に反対している）

ちょうど私達のエクアドル滞在中、この大統領選の真っ最中であったが、様々な人々との会話の中

で、圧倒的支持と言われるコレア政権に対して実際の国民の温度差を感じた。

この再選に対して彼は「エクアドル人民は再生不能な自然資源に対して、責任をもって利用することに賛成の票を投じた」とし、国の輸出の半分を石油に頼り10年後には枯渇するという状況下、コレア大統領はこれまで行わないと約束してきたエクアドル各地の鉱山の大规模開発を明言し、それはアマゾン地域にも及ぶとされ、先住民組織などの大きな反発を呼んでいる。私はコレア大統領第1期就任当初、同じくアマゾンでのシェブロン石油汚染の際、まるでヒーローのように住民側に立っていた彼の姿を苦々しく思い出した。

彼の対外姿勢は変わらずとも、環境や先住民の保護政策には変化が見られる。

石油のように鉱物資源が枯渇してしまうとどうなるのか？ 目先の開発で破壊される環境や生活文化は簡単には戻らない、安易な収入源に頼り「持続する」という視点が全く欠けているように思われるエクアドルの「今」が、世界の動向を象徴するかのようだ。

私たちの訪れたアンデスの麓インタグ地方でも、これまですでに度重なる外国企業などの強引な鉱山開発計画により、住民の生活や、生物多様性を誇る豊かな土地（雲霧林）が危機にさらされ、反対運動が続けられてきた。あらためてこの土地周辺をみてゆきたいと思う。

インバブラ県コタカチ郡（アンデス地方とインタグ地方の2つを含む）、首都から北にバスで2時間半ほどに位置したここコタカチは、とても心の落ち着くやさしい感じの土地だ。

お世話になったケチュア先住民のご家族と過ごした時間は彼らの暮らしの本質的な豊かさを垣間見られ、忘れられないような幸福感を感じた。

広がる畑では、自分たちの食べるだけのトウモロコシ、豆類、サトウキビ、薬草などが植えられていて、ここのお母さんが夕飯に炊いてくれた野菜はとても美味しかった。はしゃいだ子どもらは畑の中を

のびのびと走りまわり、収穫を手伝ったトゥモロコシはとても力強く、先祖代々のすばらしい種が育っている。野菜につく虫、実、種は鶏のエサ、葉や茎さえも牛がバリバリと食べ尽くし何も残らない。他にも豚や犬猫鳥、とにぎやかだ。

牛乳や卵、食肉も取れ、手作りのソースなども大変おいしい。おそらく排泄物は堆肥となり、家畜を通して「食」を中心とする完璧な循環が出来ている。ここのお母さんが話していた「たくさんの油や化学薬品はいらない、この野菜にはたくさん栄養があるのよ」という言葉が印象的だ。

エクアドルは35の原種をもつ「遺伝子の銀行」と呼ばれているが、ここでもコレア大統領は収穫増・貧困改善のためになると、以前は否定していた遺伝子組み換え企業モンサント社の参入を認めようとしている。世界中の農家、マーケットをあっという間に侵略してしまったこのモンサント社は改善どころか、その不自然で健康への影響も懸念される作物の遺伝子操作、悪質な企業体質により多大な不幸や貧困を生み出している。

そしてインタグ地方、(フニンという小さな村を中心に)度重なる鉱山開発の危機がこれまで繰り返されてきた。この土地を最初に汚染したのが日本の三菱マテリアルである、私達は往復30数キロの生物多様性を誇る山道をドロドロになりながら歩き続け、1992年から1997年まで探鉱を目的とした試掘が行われた場所を見に行った。

ここには有毒な重金属と混合した銅やモリブデンが埋まっており、近年携帯電話などの材料として需要が高まっている。信じがたいことだが十数年たっているというのに黒く変色する苔や、不自然にうっすらと色づく青色の川を目にした。これらは当時大量に使用されたオイルの影響や、削岩により重度に酸化した銅やヒ素が水に混入したものだと思われ、こうして影響は長期に及ぶといわれる。生活用水だったために子どもらに赤い発疹が出始め、家畜・動物などが死んでいったが、三菱マテリアルは関与を否定し、その上、村の移転を提案したという。

試掘中だった1995年には住民は環境保全団体「インタグの生態系の防衛と保全/DECOIN」をたちあげ、国際的な支援や圧力を仰ぎ、反鉱山開発キャンペーンを展開する。日本の環境・文化NGO「ナマケモノ



インタグの風景

倶楽部」もこのDECOINを支持し、様々な支援を続けてきた。

その後も2002年にはカナダのアセシダント(Ascendant Copper)社がエクアドル政府が競売にかけた採掘権を転売により購入、2004年インタグに参入、開発反対者への買収・脅迫・嫌がらせなど汚い手口を使って住民の分断をねらった。

この旅でお話を聞くことができたポリビオ・ペレスさんは反対派の重要なリーダーである。彼は攻撃的となり、家族への脅迫電話や、村の集会へゆく途中7台の車に追いかけられ拘束され書類に合意させられようとした。さらに「10万ドル(日本円で1000万円という大金)を与えるので、意見を変えて好きな国にいけばいい」と業者に言われたという。

ポリビオ氏は「親から受け継いだこの土地を愛している子どもらへも伝えたい、命がけでも守りたい。開発は企業利益のためになっても地元のためにはならず、資源、環境保護という立場で世界的な視野で考えるべきだ」と語っている。

住民側はこれまでも訴訟などの手段にも訴えてきたが業者のいやがらせは続き、このような圧力に対し住民は、作業員の不在を確認した上での鉱山業者施設の焼き討ちといった明確に抵抗の意思表示をしている。

しかし2006年、ついに武装したアセシダント社の民兵が催涙ガスや発砲により突入し、住民に負傷者がでた。必死の抵抗運動をつづけようとする120人の村人らはナタや農具を持ち「なすがままになるのはやめよう！」と民兵が武器を身に付けていない食事中をねらい、57人をつかまえ、アセシダント社と交渉するため8日間、村の教会に拘束した。情報を流

し国内外のNGOや様々な組織、TVなどのメディアが報道し、エクアドル政府は状況を収めるため鉱山開発計画の中断を決めた。

カナダのアセダント社は、銅埋蔵量の誇大広告や嘘が詐欺行為と指摘され、2010年にトロント証券取引所はこのの上場廃止を決定している、その非人道的な人権侵害は悪質である。アセダント社のスポークスマンは元軍の情報部の将軍であり、背後には地主と軍の結びつきがあり、自分たちの利益中心で犠牲になっているのは住民だ。繰り返すがこの企業は法を犯し、必要不可欠な住民の同意もないまま勝手にキャンプ地を設営し、住民の移住を要請し、殺人脅迫・買収・嫌がらせ・発砲・催涙ガスによる暴力行為をおこなっている。これがラテンアメリカにおける鉱山開発企業の実態だ。

そして今まさにエクアドル国営企業ENAMIとチリの大国営企業CODERCOがこの土地の開発計画を進めようとしている。すでにエクアドル政府は企業が参入しやすいように鉱山法を変え、その利益は中国への債務返済にあてられることも決まっている。前回、探鉱により鉱山の有望性を確認し、メジャー企業への利権の売却を商売にするというアセダント社も、中国企業がこの土地を高値で買い取ることを見込んでいたらしい。ここでは実現しなかったが、中国は高度成長のために膨大な消費があり、自国の鉱物を輸出制限しつつも他国での世界的な買いあさりや開発は目に余る。エクアドル鉱山開発に深く関わる中国が環境に配慮した開発をするのか？ 大切なのは鉱物を枯渇するまで取り尽くすのではなく、消費を減らし、私達が豊かな自然と共存するという持続する道をさがすことだ。

政府がいう「環境に配慮した開発で、住民の移転もなく、海外の企業利益より国営企業への利益配分を増やし、その収入は貧困改善のために使用する」という非の打ちどころのないような理論に対して、先ほどのポリビオ氏はこう語る。

「中国では汚職は蔓延しているし、コリア大統領は鉱山開発はしないとやってきたが、(5年後の今は大規模鉱山開発を行うと)主張は変わり、環境破壊しないなどと言われても信用できない」。彼は支援団体の招待により日本を視察に訪ねたことがあり、「日本ほどのテクノロジーの発達した国でも開発による環

境破壊はまぬがれていない」と言う。そしてグアテマラ・チリ・ペルーといった鉱山開発地を見てきた彼は「住民説得のため、多くの職がもたらされるといふ宣伝は道路建設のような一過性のものにすぎず、大幅な機械化で私たちのような農民に職はない」と語る。開発は、彼らの営む農業・酪農・エコツーリズムといったオルタナティブな産業にさえも、その影響が危惧される。

中南米では、永年の内戦により居住地を追われ傷ついた人々が、戻った故郷で鉱山開発問題により再び苦しみを味わっている。「鉱山開発に反対したら殺される」と語る人もいる。

生物多様性を誇るインタグでも、企業の環境調査報告書によって、廃棄される有毒鉱物による水質・土壌の長期汚染（想定される河川の水質汚染は通常値の100倍以上、汚染水貯蔵用ダムも必要となり、地震や大雨などの災害による汚染水流出も考えられる）、選鉱過程に使用する硫酸などの化学薬品処理の不備、森林伐採による砂漠化、生態系・絶滅危惧種への影響、人体への健康被害、採掘地の常である治安犯罪の悪化など多くの事柄が懸念される。

日本の鉱山関係者は「鉱山開発による環境破壊はさげられない。とくにメタル資源の大規模開発のインパクトはすさまじい！」と明言している。

豊さとはいったい何なのか？ 私達の生活の母体となる自然を破壊して得た利便性・裕福さが生むものは何か？ 貧困改善のために利益を使うという主張に先住民の女性はこう言う。

「ここでは飢餓で死ぬものはない、だが自然はかならず報復する」

世界的な温暖化や異常気象に表れているように、優先順位を間違えると最初に打撃をうけるのは貧困層という社会的弱者である。加速する消費や生き方をスローダウンするという幸せもあるのではないのかと、お世話になったコタカチ先住民族の暮らしのなかで感じた。

コタカチは、チョコ・マナビ生命地区とコタカチカバヤス自然保護区に含まれ、地球上の25の生物多様性ホットスポット（生物多様性が豊かであるが、多くの絶滅危惧種が生息し危機に瀕していることを理由に制定された地域）のうち2つが存在する貴重な土地だ。

2000年に「コタカチ環境保全郡」を宣言し「環境保全条例」も同時に発令、豊かな自然文化を守ろうと取り組んでいる。キチュア系先住民の割合も多いこの土地では、差別されてきた先住民族の人権を取り戻すために発足した「コタカチ農民と先住民の組織連合/UNORCAC」の取り組みにより、国に考慮されていない水道・医療・学校・電気などの公共サービスの普及、営利目的の原生林の伐採禁止、伝統的な農法や薬草の知識の復活、環境に配慮した農牧畜、品質と食物自給率の向上をはかっている。

そのほか、「インタグ生産者組合/AACRI」では売れるからといってコーヒーだけを単一栽培しないようにし、学習会、植林による森の再生、自然体系を重視する森林農法の普及など、農民の協力で25年前と比べ3倍の収穫高となっている。フェアトレードを確立し、大規模栽培ではないが上質で安定した価格、土地を痩せさせない持続的な方法で、環境を守りながら収入源を保持している。

ここではそのほか、キチュア語とスペイン語の2言語教育・環境教育・エコツーリズム・地域通貨システム・女性の現金収入につながる手工業製品の販売など様々な取り組みがあり、2000年にはアラブ首長国連邦より「国際ドバイ賞」、2002年にはUNESCOより「平和都市賞」を受賞している。

エクアドルには、人間の生きるべき在り方や、「幸せ」を享受する本当の意味での豊かさが提示されている。貴重な動植物がすでに残り1割にすぎないという「ノアの方舟」を壊すか生かすかは、私達の決断に委ねられていると思う。

中南米で、いや世界的に大きな問題になっている資源開発は、目先の利益から離れ、様々な生物、人間そのものの生命につながる事柄として緊急な対応が迫られると思う。

●エクアドル憲法第14条抜粋「住民の権利を認め、健全な環境を保障し、よりよく生きる (Sumak Kawsay) 」

ナマケモノ倶楽部駐在員・和田彩子さん講演会「エクアドル先住民と共に」

日時： 2013年11月1日 18時開場、18時半開演、20時半閉会予定。

場所： 多目的カフェ「かぜのね」

〒606-8204 京都市左京区田中下柳町7の2 電話：075-721-4522

[http://www.kazenone.org/modules/contents/index.php?content\\_id=3](http://www.kazenone.org/modules/contents/index.php?content_id=3)

参加費：資料代含めて1000円

主催： 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク、共催： ナマケモノ倶楽部

## 鉱山開発に抵抗するアンデスの人々

ラウル・シベチ (2011年3月11日)

<http://www.cipamericas.org/es/archives/9143>

ペルーでは、国土の実に5分の1が多国籍鉱山会社の手にあり、さらにアンデス山岳地の農民や先住民が暮らす地域では、その割合は2分の1にまで下がる。金儲けだけを至上の価値として、金や銀、銅をかき集めようとする貪欲な大資本の活動の最大の犠牲者となっているのは、地域の一般住民と自然環境である。人々がこれまでどのようなかたちで運動を行ってきたかを見れば、社会運動が根底から変化し

たことがわかる。

「20年も続いた内戦で、われわれは根こそぎやられてしまった」と語るのは、1960年代にクスコで農地回復を求める闘争を率いたケチュア民族のかつての農民リーダー、ウゴ・ブランコである。だが彼は現状に対しては楽観的な様子だ。「まずコンガ地区、今度はカニヤリス地区で闘争があったが、これらを見ると、昔とは方向性は異なるが、社会運動が進展して

いるのがわかる。古い中央の農民組織が衰えて、地域のグループが実際の闘争でより人々の意見を代表する存在になってきている。

ペルーは鉱山の国である。植民地時代から今日まで、鉱山開発はアンデス地方に暮らす人々の社会的、政治的なあり方を塗り替えてきた。ここ数十年の間に、鉱山は芸術や文学でも題材として取り上げられるようになってきた。鉱山はとりわけ農民の間で大きな影響を及ぼしており、そのことはペルーを代表する作家のひとりであるマヌエル・スコルサの小説にも描かれている。にもかかわらず鉱山開発に反対する運動は、文学など創作の分野では目立った扱いはされてこなかった。

だが近年、事情は大きく転換した。2012年はとくに大きな社会的紛争があった年である。民間団体「ペルー鉱山紛争オブザーバー」が指摘するように、紛争の激化は対立の深まりを招いたが、また計画を変更させる力ともなってきた。鉱山開発を巡る紛争によって、オジャンタ・ウマラ政権は、誕生からわずか半年の2011年12月とその半年後の2012年7月の2度も内閣の改組に追い込まれた。

「国内でも辺鄙な地方の鉱山紛争が大手の新聞の一面に取り上げられ、あらゆるメディアで何週間も話題になるなど、10年前には考えられなかった」と同団体は指摘する。だがもっとも注目すべき点は、「鉱山開発に関連した社会紛争が、重要な政治的紛争にまでなった」ことだという。債券格付け機関のムーディーズまでもが、コンガ鉱山の紛争へのこれまでの政府の対応が、鉱山部門への投資に悪影響を与えている可能性がある」と指摘している。

鉱山開発に対する抵抗運動の重要性を理解するには、3つの側面から見ていく必要がある。まず、巨大鉱山開発がペルーにおいて多国籍資本が集中する代表的な形態のひとつであること。そして、農民の抵抗運動が共同体的な性格を持ち、それゆえ5世紀にわたる先住民の抵抗運動と結びついた土地領有権の問題でもあること。さらに運動のあり方が中央集権的に組織化されたものとは異なり、新たな政治活動の文化が生まれていることである。

## 鉱山植民地主義の最中にあるペルー

2012年11月、2400万ヘクタールの土地の採掘権が認可された。これはペルー全土の19%に相当する面積である。鉱山開発の対象となったのは、おもに国の中部および北部の山岳地と沿岸部の農民共同体の土地で、そこでは土地の半分近くが鉱山会社の手に入った。

すなわち、農民共同体の土地の49.6%が鉱山の採掘対象とされたのである。太平洋側地域の水源地帯の約半分(47%)が鉱山開発の対象となったが、そこに暮らす人口の65%は国内のわずか1.8%の水しか利用できていない。そのため、鉱山開発が国に利益をもたらすという政府の主張は、土地を失い、水も利用できなくなってしまう村の人々から断固として拒否された。

「金属経済グループ」の最近の報告によると、世界的な株式市場の下落が鉱山への投資を促しており、2009年に急落した後、2010年には44%、2011年には50%もの増加があった。ラテンアメリカ地域にはとくに鉱山投資が集中しており、全体の25%を占めている。なかでも多いのが、チリ、ペルー、ブラジル、コロンビア、メキシコ、アルゼンチンである。

2003年にはラテンアメリカは世界の鉱山投資のわずか10%を占めるだけだったものが急拡大した。中南米地域では、ペルーはチリと並んで鉱山投資がもっとも集中している国である。2010年にはラテンアメリカ地域は世界の銀の51%、リチウムの半分、銅の45%、モリブデンの27%、錫の27%、亜鉛とボーキサイト各23%、金19%、鉄18%を産出している。2020年までに鉱山セクターには3000億ドルの投資が見込まれている。

ペルーへの外国からの直接投資は近年急拡大した。2000～2005年には年平均16億ドルに過ぎなかった投資が、2012年には110億ドルに跳ね上っており、これは2011年と比較して34%もの増加である。問題は、投資の大部分が鉱山と炭化水素(石油・天然ガス)で占められている点である。投資額の約3分の2は天然資源部門に対するものであり、製造業にはわずか8.7%しか向けられていない。

このような形の投資は天然資源の採掘と輸出への依存度をさらに高めることになる。ペルー人ジャーナリスト、ラウル・ウィエネルによると、ペルーは

国庫収入の30%を鉱業から得ており、「短期的に国庫収入を増やし、選挙に勝つためにあらゆる候補者が公約している社会政策を実現させるための手っ取り早い唯一の方法は、鉱山への投資を増やすことである。そのため、鉱山セクターを敵に回すことは自滅するに等しい」という。

ペルーの輸出額は、2002年の76億から2011年には457億ドルにまで拡大し、その増加率は世界でも5番目に位置付けられている。その約60%は鉱物資源、10%が石油と天然ガスで、いずれも未加工のまま輸出されている。ラテンアメリカのなかでは、金、亜鉛、鉛、錫の最大の輸出国で、銀と銅は2番目である。将来的にも投資と輸出が鉱業に集中する傾向はさらに強まることが見込まれている。鉱山紛争オブザーバーによると、2006年から2010年の間に鉱山採掘の認可件数は2倍になったという。

## アンデスにおける抵抗

2011年の後半から2012年の大方の期間において、ペルー国内での鉱山その他の問題を巡るおもな紛争は、北部のカハマルカ地方で起こっている。これは、アメリカのニューモント鉱山会社が所有するヤナコチャ鉱山で、金と銀を採掘するコンガ計画に対して住民が大規模な反対運動を展開しているためである。この鉱山会社はカハマルカ市の北50キロ、標高3400メートルの高地で、20年以上前から金を採掘してきた。これは世界でも2番目に大きな金鉱山である。

だが、ここ数年来ヤナコチャ鉱山は資源が枯渇したため、産出量が低下していた。そのため会社はコンガ計画を立ち上げたのである。しかし住民はヤナコチャで何が起きたか経験済みであり、何年も前から水を守るために運動を始めていた。最大の問題は、鉱山開発ではシアン化合物や水銀も使用し、地域の農村や都市に水を供給している高原の湖を汚染してしまうことである。

2011年11月から12月には、カハマルカでの住民の抵抗運動によって戒厳令が出され、いくつもの県に軍が出動するに至った。これにより、内閣が改組され、推進に積極的な閣僚の大部分が交代することになった。コンガ計画でもっとも大きな影響を受ける

地区のひとつ、バンバマルカ地区では、兵士らが国旗掲揚の儀式を行うのを住民が阻止し、紛争がもっとも激しいセレンディン地区では、兵士らが住民によって広場から追い出された。農民自衛団は未成年者に売春をさせようとしていた兵士らを拘束した。

2012年には167件の紛争が報告されたが、そのうち123件は「社会環境問題」と人権オンブズマン組織が呼ぶタイプの紛争であり、「労働問題」はわずか7件だけだった。農民たちは土地も水も奪われ、あらゆる力を振り絞り、村を挙げて抵抗している。あるアンケートによると、カハマルカの住民の78%がコンガ計画に反対している。抵抗運動の中心地はカハマルカやさらに最近ではランバイエケ地方、カニヤリス地区ではあるが、鉱山紛争はペルー全土に影響を及ぼしている。

実情をより間近で見ると、人々が驚くほど多様な手段を講じているのがわかる。県や地区ごとに防衛戦線を創設し、郡や県で住民投票を行い、デモ、地域でのストライキ、道路封鎖も行ってきた。活動の中でもっとも重要なもののひとつは、農民自衛団の活動である。これは1970年代にカハマルカとピウラで家畜泥棒対策として作られた共同体の自衛組織である。

コンガ鉱山にもっとも近い3つの地域、カハマルカ、バンバマルカ、セレンディンの自衛団員らは、鉱山計画によって影響を受ける湖の周囲に集団でキャンプを張り、見回りを行い、その地域で会社が行うあらゆる作業を阻止しようとしている。この活動は11月に始まり、「湖防衛隊」と名付けられた。

このうち、セレンディンのキャンプは警察に破壊されてしまった。そのため、カハマルカ統一闘争部隊は、「共同作業で農民自衛団のための家を2軒建設して、自衛団員や訪問者が夜を過ごし、しっかりと闘っていけるようにする」という。

この土地支配をめぐる闘いに対抗して政府は地域に軍を派遣し、一方ヤナコチャ鉱山は村人が通れないよう道路を封鎖した。村の共同体ではあらゆる道路や集落に、村の名前に続けて「鉱山のない自衛団の土地」と書いたポスターを張り出した。土地の領有権を主張するためにサパティスタが用いた手法とよく似ている。

多くの県で戒厳令が出され軍隊が出動したことで、2011年12月から2012年9月までの間に17人の死者が出たと人権協会は報告している。2012年7月にセレンディンとバンバマルカで5人の村人が死亡。ブラジルとボリビアとの国境にあるマドレ・デ・ディオスの小規模な不法鉱山を撤去させようとして3人、クスコのエスピナルではストラタ第5鉱山に対する反対運動で2人、アンカシュのバリク鉱山での抗争で1人が死亡した。

オジャンタ・ウマラ政権は、前のアラン・ガルシア政権が成立させた、国内の治安維持に軍の介入を認める1095政令を適用し、抗議行動の参加者を「敵対的グループ」とみなし攻撃した。一方、軍による人権侵害は軍事法廷で裁かれている。

## 新しいかたちの組織化と活動

ここ2か月の間に、北部にあるランバイエケ県で新しい抗争が起こった。農民たちは抗争についてきわめて簡潔に、自分たちの世界観を反映する表現をしている。「われわれ先住民が抵抗運動を起こした理由は、カンデンテ銅鉱山会社カニヤリアコ支部が、われらが祖先から受け継いだ土地に干渉し侵入してきたためだ」

世論に再度訴えるために、9月30日に住民投票が行われ、95%の住民が鉱山開発に反対を表明した。1月20日、地域ストライキが行われ、25日には、カナダ資本のカンデンテ銅山が3つの銅脈の採掘計画を継続するのを阻止しようと道路封鎖を行っていた24人の農民が警察から暴行を受けて負傷した。2月5日付の農民団体が発表した宣言文の次の一文には、国と農村共同体の間の対立の深さが浮き彫りにされている。「われわれは協議のための条件として、われわれの土地から警察が即時撤退することを求める。われわれの慣習法による権利として、共同体での治安は自衛団によって維持されており、重装備の警察部隊が地域に駐留する必要はないからである」

さらに続けて、「われわれ先住民族の代表者、共同体住民、自衛団員らは、先住民族としての自分たちの主義と権利を放棄するつもりはない。先住民族の真正な、本来的な社会の在り方を破壊する植民地

主義に従属することはけっしてない」と述べている。

しかし多くの評論家や識者は、ペルーには社会運動は存在しないと考え、鉱山反対運動はまとまりがなく、相互に連携していないとみている。研究者であり活動家でもあるラファエル・オエメルは次のように述べている。「ペルーにおける社会運動は、全国的に統合された代表組織に集約されたり連携されたりしていない。むしろ単発的な性格だといえる」だが同じ論文のなかで、社会運動が存在しないという意見には反論し、「運動において人々が全国組織を必要としない状況もある。一方で地域ごとに異なる行動計画を相互にすり合わせたり全国的な予定と合わせたりするための困難もある」と評価している。じっさい、大規模な組織は鉱山反対運動では何の役目も果たしていない。

さらに続けて、闘争は勝利を収めたが、このことは強大な組織が創出されたことを意味するものではないと指摘している。「これらの勝利によって組織がより強力なものに転換することは非常に難しい」。実際、大規模な闘争でも、もはや昔のCGTPやCCP、より最近ではCONACAMIのような大手の組織によって主導されていないものも出てきている。

この点については、見方を変える必要があるようだ。ウゴ・ブランコはCCP以来の大規模な運動組織が主導した時代を生き、いまはカハマルカの活動に参加しているが、彼の意見は明確だ。彼によれば、共同的に闘争を推進することが同時に「さらに運動を民主的なものにする」ことになっているという。そこでは命令を出すのは集団自身であり、指導者ではない。そこでの中心的な活動が選挙キャンペーンになってはいけない」

彼は少ない言葉のなかでカギとなる3つの点を指摘している。官僚的な機構を作ることなく闘争をコーディネートし、そこでは人々自身が決定権を持つこと（これはサパティスタが「人々の意見に従って命令する」と呼ぶものである）。闘争を国家体制に組み込んでしまうことになる選挙にかかわるのを避けること。さらに言葉にはしていないが、彼は新しい政治文化が生まれたことを語っている。古い政治文化がもはや限界にきているのは明らかだ。

（訳：山本昭代）

# 日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から

## ジョローナ

伊香祝子

今回は少々趣向を変えて、「ジョローナ」という米国南西部からチリに至るまでの広い範囲（主にスペイン語圏）で知られるお化けの話をしていきます。ジョローナ

(Llorona) はスペイン語で泣くという行為を表す動詞“llorar”からできた言葉で「泣き虫の女、ぐちゃぽい女」などという意味がありますが、女性定冠詞“la”を伴い大文字で始まる“La Llorona”は、ちょっと特別な存在です。

ジョローナの言い伝えには諸説あるのですが、最大公約数としては、(1)美しい娘が、よそから来た男と恋をし、子どもをもうける、(2)男の裏切りによって錯乱し、わが子を水死させてしまう、(3)子どもを手にかけての苦しみに、夜になると水のある川や湖沼などに現れて、すすり泣きながらさまよう悪霊となり、水辺に近づくものに悪さをする、というものです。したがって、子どもたちは「ジョローナが来るから、水辺に近づいてはだめだよ」とか「夜出歩くと、ジョローナに連れて行かれるよ」などといっておどかされるのです。

諸説と言いましたが、メキシコでは、スペインによる植民地支配の行われていた16世紀に実在した女性（征服者コルテスの右腕となって働き、子をもうけた先住民族女性マリンチュ、また身分違いの恋をして裏切られた女性など）と重ね合わせて語られたり、先住民族の女神が形を変えたものとする説もあります。

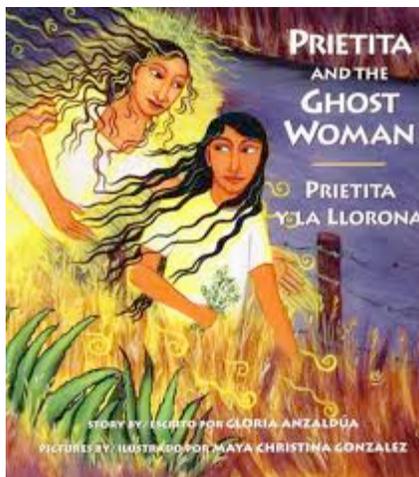
ここで、映像や本の形で接することのできるジョローナ像のなかから、現時点でわかる範囲でいくつか挙げてみたいと思います。

まず、最も典型的なものとしては、民話研究家・作家のジョー・ヘイズ(Joe Hayes)が英語と、部分的

にスペイン語で語るラ・ジョローナの伝説 [http://www.youtube.com/watch?v=D3MK6q\\_vfGk](http://www.youtube.com/watch?v=D3MK6q_vfGk) (リンクは

youtube) があります。ちょっと怖くて面白い怪談といった趣です。

一方、米国のチカーノ（メキシコ系アメリカ人）社会に生まれ、新しいチカーノ女性像を追求したグロリア・アンサルドゥアのジョローナ像は、ポジティブなものです。彼女は、バイリンガルの絵本『プリエティータとジョローナ』で、母親のための薬草をとりに出かけ、迷子になった少女を、暗闇の中で導く存在としてジョローナを



描いています。アンサルドゥアは、伝説のジョローナが、邪悪なだけの存在なのか、子どもたちから疑問に思っていたそうです。また、シカゴ生まれの詩人サンドラ・シスネロスは、DVから逃れ、子連れで米墨国境を超える女性が、「泣く女」ではなく「大声で笑う女」としての自分を発見するお話を書いています。いくつかの作品で典型的なジョローナを登場させるルドルフォ・アナヤも、太陽の子として永遠の命を持って生まれたために、時の神にねたまれ、だまされてわが子を手にかけて娘＝ジョローナという新たな解釈の物語を書いています。

こうした創作や再話は、時代や語り手によって、聞き手が抱くイメージが変わりうること、そこから新しい語りが生まれてくる可能性を私たちに教えてくれます。

シスネロス、サンドラ『サンアントニオの青い月』  
くぼたのぞみ訳 晶文社、1996

Anaya, Rudolfo "La Llorona/The Crying Woman"  
2011 Univ. of New Mexico Press

Anzaldúa, Gloria "Prietita y La Llorona/ Prietita and the  
Ghost Woman" 1996 Children's Book Press

## 第68景 パブロ・ネルーダの記憶

私が世界で最も好きな詩人の中の一人は、チリのノーベル文学賞詩人パブロ・ネルーダ（1904～73）である。1970年代初め、アジェンデ社会主義政権時代のチリを取材していたときのことだ。サンティアゴからタクシーで郊外に出るとき、運転手がラジオをつけた。しゃがれ声が車内に拡がった。それも格調高い声だ。ネルーダだった。

「チーレ（チリ）、お前が黙っているときが好きだ、ここに居ないみたいだからだ。

チーレ、お前が眠っている時が好きだ、遠くに居みたいだからだ。

チーレ、お前が遠くに居るときが好きだ、我が心の中に居るからだ」

この詩人の青年時代の代表作『20の愛の詩と1つの絶望の歌』の「20の愛の詩」の第15番の内容を少し変えた詩である。詩人は「チーレ」を、その時々愛した女性の名前に置き換えては詩っていた。

彼方には、冠雪し美しく輝くアンデス山脈が視界の彼方まで続く。運転手は労働者だった。「パブロは今、大使として巴里にいるけれど、たまに帰ってきては自作を朗読する。我々の心を癒すためだ」。「アミーゴ、ネルーダのために乾杯しないか」私は思わず口にした。彼は笑って、どこかの農家の庭に車を止めた。「この主人はアミーゴだ」と紹介された赤ら顔の農夫は、自家製の赤い葡萄酒とソーセージを振舞ってくれた。

1973年9月11日、ピノチェーラの軍事クーデターでアジェンデ政権は破壊され、サルバドル・アジェンデは自殺に追い込まれた。「ヌエバ・カンシオン（新しい歌）」の旗頭ビクトル・ハラも両

手を碎かれ殺害された。3万8000人が拷問され、3500人が殺された。あの恐るべき政変から40年が過ぎた。私は、あの流血の巷を取材した。

我がネルーダはクーデターから間もない9月23日、首都のサンタマリーア診療所で死んだ。当時は「前立腺の末期癌」と発表された。だが今では、医師を装った軍政の回し者に毒殺された可能性が濃い。太平洋岸イスラ・ネグラの邸宅から軍に誘導されて首都のその診療所に入れられたが、体調は悪くなく、翌日にはメキシコに亡命するはずだった。

近年発覚したことだが、アジェンデの直前の大統領だったエドゥアルド・フレイは1982年1月、同じサンタマリーア診療所でイペリット（マスタードガス）とタリウムを注入され殺された。ネルーダが同様の犠牲者になった公算は決して小さくない。世界的著名人ネルーダがメキシコに去れば、ピノチェー軍政にとって「最悪の批判者」を国外に持つことになるからだった。

ネルーダの遺体（遺骨）は今年4月発掘され、現在、米国とスペインの研究機関で毒殺だったか否かの調査が続けられている。23日の死去40周年の日に結果が発表されるかもしれない。彼の詩をこよなく愛する世界中の人々が結果を待っている。

【伊高浩昭執筆の関連記事：LATINA9月号「チリ・イースター島ルポ」、同10月号（9月20日発売）「チリ先住民マプーチェルポ」。「世界」11月号（10月8日発売）長文解説「チリ政変40周年」。その他；週刊「エコノミスト」8月27日号大型解説「ニカラグア運河計画」。「週刊金曜日」9月6日号解説「パラグアイ新政権発足」】

## 今更ペルー音楽との出会いを語ってみる

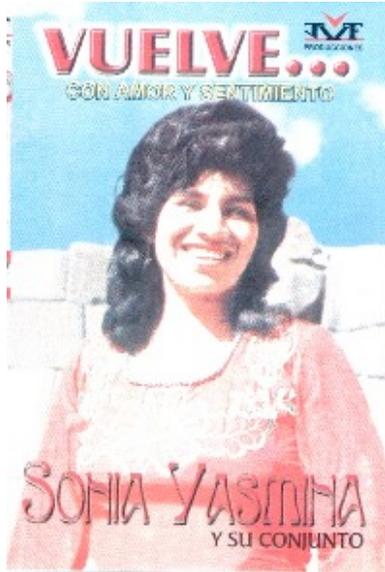
今回は、ちょっと趣向を変えて私自身のペルー音楽との出会いについて紹介する中で、ペルー音楽の魅力を書いてみたいと思う。

そんな話をしようと思ったのは、先日クスコ在住のペルー人の友人と話していた折、彼女が学生時代だった1980年代の思い出のワイノは、ソニア・ヤスミナ=写真=だった、という話で大いに盛り上がったからだ。

というのも、ソニア・ヤスミナこそが、私がペルー音楽の特定の歌手でハマった最初の一人だったからだ。けっして録音数は多くない

が、彼女の伸びやかな歌声とバックの堅実な演奏、そしてクスコを中心とするワイノの名曲を情感たっぷりに歌い上げるその雰囲気には僕はノックアウトされたのだった。

当時、僕は確か大学の4回生を終えた頃で、ペルーに1ヶ月滞在して、何やら観光客向けに地元の音楽でなくボリビア・スタイルのいわゆる「ネオ・フォルクローレ」音楽をペルー音楽として提供しているという状況にいろいろ疑問を感じて、そこから地元音楽に興味を持ち始めたところだった。とはいえ、当時はなかなか情報もなかったなか、知り合ったペルー音楽愛好家の友人に送ってもらったMDに入っていた歌手の一人がソニア・ヤスミナだったのだ。クスコを代表する名曲「バリチャ」や「カプリ・ニャウイ」などを中心に、アヤクーチョやワンカーヨ、ワラスなどの名曲まで含めて、甘く、情感たっぷりに伸びやかに彼女は歌った。その歌声には、今思うと少し北部の雰囲気なども感じさせるところもあるが、彼女はクスコ近郊、マチュピチュの先にあるコーヒーの産地キジャバンバ出身の歌手だ。徐々にペルー国内のテロが本格化し、ワイノも政治的色合いが強いものなどが出てきて取り締まられたりする



中、センチメントたっぷりのその歌声は、クスコの酒場でもっとも愛されたという。多くの男が酒を飲みながら彼女の歌声を聴いて涙したというから、その位置付けはある意味ボレロ的なものもあったのだろう。そうして愛されたソニアはしかし、行く先々でのコンサートで勧められたお酒が原因でアルコール中毒となり、ついには歌えなくなってしまった。全盛期に歌手生命を絶たれたソニアだが、熱烈なファンは今なおクスコ各地におり、私がクスコに滞在していた頃にはサン・ヘロニモ(クスコの郊外)に住んでいるという噂話を

聞いたり、最近また歌い始めたという話を聞いて少し胸を熱くしていたところだった。

友人との話でそんな逸話が一気に蘇り、2人で彼女の歌を聴きながら話し込んだのだが、あとでYouTubeで調べてみると、なんと彼女のビデオがアップされている。それだけで本当にすこしウルツときてしまった。若いころの歌声を残す彼女の伸びやかな声と、老けこんだ顔。ビデオを見ながら、再びこうして彼女の歌声を聴けることの幸せを噛み締めた。

思い返せば、初めての滞在先がクスコであったこともあり、私はアンデス音楽として大きな影響力を持つアヤクーチョやワラス、プーノよりもクスコの音楽から入っていったところがある。クスコの音楽は20世紀初頭にはインカ直系の音楽というイメージ戦略で大いに盛り上がったが、程なく主導権はワンカーヨやワラス、アヤクーチョなどに持って行かれ、音楽的影響力はどんどんと地盤沈下していった。それでも数々の名曲や名音楽家が活躍した土地であり、地方色も豊かで、ペルーアンデス音楽の入門の地としては決して悪くなかったな、と思う。このまま書き続けるとクスコ音楽の紹介になりそうな

のでこの辺りでとどめるが、クスコを介して私はペルー音楽と出会い、そこからその奥深い音楽世界へとさまよい出ていったのだな、とつくづく思うのだ。

一方、沿岸音楽に出会ったのはもっと偶発的なものだった。このエピソードはこれまでも書いているが、これまたクスコのレストランでかかっていたラジオから流れていたエバ・アイジョンにビビッと来て、お店の人に歌手の名前を聞いてメルカド(市場)で海賊版を探して買ったのが初めだった。紛れもなく現代クリオーヤ音楽最高の歌手であるエバ・アイジョンの良さは当然ながら、エバ・アイジョンを入りに聴き始めてはじめにハマった歌手はと考えると、マリツァ・ロドリゲス=写真=だったなあ、と思う。あと、ロス・キプスもかなりハマったが、キプスはトップボーカルの女性がどんどん変わっていくという特殊なスタイルのため、キプスの歌声が好きと言っても、それは誰の時?ということになる。ちなみにエバ・アイジョンもキプスで歌って名を上げた歌手の代表格である。

さて、で、マリツァだ。プリンセシータ・デ・ノルテの二つ名で愛される彼女の歌声を一言で表すと子ども声。このハスキーで甘い声に惚れるも、なかなかこれも音源が売ってない。ペルーよりもボリビアで多く見かけたのは意外だったが、それはこういった声の需要がしっかりある、ということなのだろうか。多くはないけれども、これ系の声の歌手も確かに各地に入るように思う。ちなみに、2000年代初頭に生でマリツァと見る機会に恵まれたが、すっかりドスの効いたきっぷの良い感じのおぼちゃん歌手になっていて、貫禄の歌声でバルスを熱唱しておりました。それでも往年の面影をそこに見出して感動してウルウルしてたんですけどね。

そしてチチャ。僕がペルーに親しみ始めた頃は既に呼び名はテクノクンビアが主流になっていた頃でしたが、初めてペルーに行った頃は、クンビアもチ

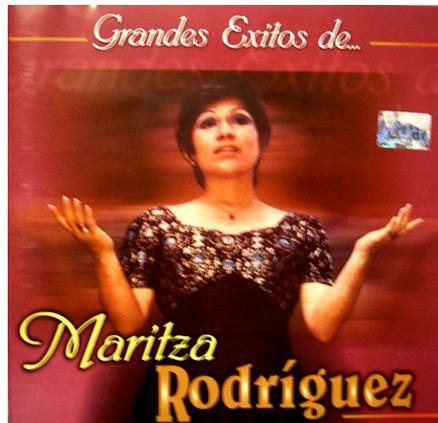
チャも全然知らなかったし、まだ興味もなかった頃でした。とにかく街のあちこちで大音量で流れていて、頭にこびりついて離れない音楽、というイメージで、なんだかなあ…と思っていたのが、帰国すると、あの粘着トロピカル音楽がなんだか懐かしくて仕方ない。あの音楽と排気ガスが最もペルー的な思ひ出に直結しているような気がしてくる。そんなこんなで、2回目にペルーに行った時に、街の海賊カセットテープ屋さんの軒下で、前回の記憶を振り絞ってこんな感じの曲、と適当に雰囲気を書いて伝えたところ、出てきたのがルツ・カーリーナだった。

当時全盛期のテクノクンビアの代表格で、激しい露出に鳥の羽などをまとったステレオタイプの格好で、これまた艶っぽく歌う女性歌手だ。一気にこれもハマったわけだが、そうすると新たにみえてくる世界がある。ペルー音楽の地平が突然一気に広がる。ああ、こういう民衆音楽の世界があったのだな、と実感したものだ。なんせ、当時テクノクンビアは、長距離バ

スなどに乗っても大抵ビデオがかかっている、老若男女を問わず楽しめるまさに大衆歌謡の象徴みたいな存在だった。当時はアグア・ドゥルセの「ブレラ・パロミータ」という曲が流行っていてこれまたなかなか頭を離れない曲で、帰国後友達たちと日本で演奏したこともあるぐらいだ。

そんなこんなで、シエラ(アンデス地域)、コスタ(沿岸地域)、クンビアとペルーを代表する3つの音楽と私がどのように出会っていったのかを紹介したが、個人的な好みも強いながら、それだけの魅力ある歌手、ぜひ良かったらペルー音楽への入り口として聴いてみて貰えたら嬉しく思います。あ、別に女性歌手しかハマらなかったわけではないですよ。男性ボーカルとしては、シエラならロス・カンペシーノスとロス・アマル・デ・ティンタというクスコの老舗コンフントに、コスタはサンボ・カベローに、そしてクンビアはアルモニア10(ディエス)にそれぞれハマりましたからね！

(水口良樹)



# トルティーヤの炒め煮

Sopa Seca de Tortillas

(Pasticho o Lasaña estilo Yucatán)

今回はとても古くから伝わる、おいしくて滋養豊かな「ユカタン風トルティーヤの炒め煮（ラザニア）」です。ユカタン独特の、材料がきわめて少ないシンプルな料理です。

この料理は、スペイン人のアメリカ大陸到来で大きく変容しました。とくに、チーズやクリームをつくる牛乳が大きな意味を持ちました。

マヤの時代からこの料理はつくられ、今でもマヤ文明の栄えた地域では特別な料理になっています。

私が子どものころ、忙しくて夕食の準備に手をかけられないとき、母は昼食や前日などに余ったトルティーヤを利用しました。メキシコでは余ったトルティーヤは天日でかわかし、急場の料理などの材料にしています。シンプルに揚げてコーンチップスにもします。揚げたトルティーヤは、スープやその他の料理のトッピングにも使います。乾燥トルティーヤやそのフライは、料理に魔法をかけることができるのです。

メキシコ料理は、7000年に及ぶ歴史によってユネスコの世界無形文化遺産に認定されました。無数の料理の作り方は大きくは変わっていませんが、ヨーロッパやアジア・アフリカ、その他からもたらされた材料はメキシコ料理をいっそう豊かにしました。トウモロコシの栽培や料理での利用は、メキシコ料理のなかで



もっとも長い歴史をもち、世界的にも、米や小麦よりもはるか昔にさかのぼることができます。

古代マヤ人は、チーズを使わずこの料理をつくりました。ユカタンでは、どんな時でも、とりわけ、冷蔵庫に肉類やその他の材料がないときにこの料理をつくります。

チーズやサワークリームは、この料理に新しい味を与えました。サワークリームを入手できないときは、パルメザンチーズを使えば、おいしい「乾いたトルティーヤスープ」をつくることができます。

ビールやワイン、ジュースや清涼飲料水、お茶ともいっしょに召し上がってください。

夕食でも朝食でも昼食でも、いつでもおいしく食べられます。

訪問客があり、手のかかる料理をつくる十分な材料がないとき、きょうつかう材料で、十分おいしくて健康によい料理を準備できます。子どもにも喜ばれることでしょう。

## ■材料 4人分

- ・トウモロコシのトルティーヤ 12枚  
あるいはトルティーヤチップ1パック（160g）  
（Doritosなどのメーカーがある）
- ・トマト中 4個 ・タマネギ中 1個
- ・インゲン豆の缶詰（425g）1缶（N&WなどのBlack Beans）
- ・パルメザンチーズ お好みの量
- ・サワークリーム ・水 15カップ
- ・サラダ油 大さじ2杯 ・塩 コシヨウ

## ■作り方

- 1) 缶詰のインゲンに水と塩を加えてミキサーにかける。ミキサーがなければ、深くて大きな皿でつぶし、水と塩を加えて混ぜる。できたものを大きめのフライパンに入れる。
- 2) トウモロコシのトルティーヤがあるならば三角形に切る。トルティーヤチップを使う場合は、味のついていな

いプレーンの製品を使う（塩が含まれている場合は、塩加減を調節してください）。

- 3) 三角形に切ったトルティーヤをフライパンにひとつずつ載せ、トルティーヤの形が崩れない程度に豆とまぜる。
- 4) レンジを点火し弱火にしてふたをする。トルティーヤが崩れないようあまり動かさないように。水が足りなければ加えるが、スープ状にならないよう気をつける。トルティーヤがラザニアのようになるぐらいまで火を通す。
- 5) トマトソース： タマネギトマト、コリアンダーを細かく刻む。
- 6) 別のフライパンで油をあたため、刻んだタマネギとトマトを加え、塩こしょうをする。ソースがとろみが出るまで炒める。
- 7) フライパンの「汁なしトルティーヤスープ」を4つに切り分けて大皿にのせ、トマトソースをかける。その上にパルメザンチーズとコリアンダー、最後にサワークリームをかける。お好みでハラペーニョのをのせてもよい。

## コロンビア コカ栽培が減少、しかし……

コロンビアでのコカ栽培地が昨年より25%減っている。薬物犯罪に対する国連事務所（UNODC）の最新の報告によれば、これほどのスピードでコカ栽培が減少したことはかつてなかった。8月の報告書では栽培面積は4万8千ヘクタールで、コロンビアがコカ栽培で世界1だったときの3分の1以下である。だが、コロンビアでコカ栽培が減少した分、ボリビアやペルーでは生産が増えており、特にペルーは現在生産量が世界1だ。しかもUNODCの報告によれば、コロンビアでのコカ栽培は25%減少したが、コカインの生産そのものは10%しか減少していない。これは、化学肥料が改善され、コカの葉の精製技術やアルカロイドの含有量を多く含むような栽培技術の向上によるものだ。コロンビア当局は2007年から、コカ栽培地の根絶よりもコカインの精製施設や海外への輸送ルートを攻撃するなど麻薬組織に対しての取り締まりを強化しており、その結果、これら麻薬組織が国外へ退去したり、コカに替わる新たな資金源として、国際価格が上昇している金の違法採掘にシフトし始めている。コカ栽培に従事していた人々が実入りのよい金鉱の仕事に移っている。また米国のコカインの需要が減ったこともコカ栽培減少の要因となっている。コカ栽培減少は栽培地域の人たちが正当に収入を得られる道が見つけられるかどうかにかかっている。（BBCMUNDO/2013/08/09 より）

## ボリビア 刑務所内の暴動で死者30人、多数が負傷

サンタクルス県パルマソラ総合刑務所内の重犯罪者を収容しているハイ・セキュリティ部門チョンチョコリートで8月23日、囚人同士の抗争が起こり、幼児1人を含む30人が死亡、50人あまりの負傷者が出た。あるグループが他のグループに対してプロパンガスのボンベを爆発させたのが発端。火事と銃撃戦で多数の死傷者が出た。チョンチョコリートには500人の囚人がいた。テレビ報道では煙を逃れて屋根から逃げようとする囚人の痛ましい様子が映された。

パルマソラはボリビアで最も囚人収容数が超過している刑務所の1つで、5000人以上の受刑者がいる。そのうち有罪判決を受けているのは400人だけで残りは予防拘禁。チョンチョコリートはボリビアで最も危険な刑務所と言われ、ここでは囚人と警官、判事が共に違法ビジネスに精を出していることも公然の秘密だった。悲惨な事故の背景には、刑務所の治安管理が不十分だったことがある。面会人らによって武器や酒などが自由に持ち込まれ、携帯電話を持っている囚人も多く、麻薬の売買や恐喝など違法行為も横行している。刑務所内は一種の城塞都市の様相を呈している。家族連れで入っている囚人もおり、全体で500人の子どもが親と一緒に住んでいるという。刑務所内には幼稚園があり、刑務所から学校に通う子どももいる。これらの子どもは常に刑務所内での暴力にさらされている。（BBCMundo.com 23 de agosto de 2013, Datos Bolivia Febrero 2013より）

## ハイチ 農民組織が米国の食糧主権賞を受賞

ハイチの農業5団体による連合が米国の第5回食糧主権賞を受賞した。同賞は食糧主権アライアンスが出すもので、食糧民主主義を推進し飢餓や貧困と闘うグラスルーツの団体に授与される。ハイチの受賞5団体は国際的な農民組織であるピア・カンペシーナから支援を受けて活動しており、ハイチの25万人以上の農民が参加している。この5団体はハイチ小農組織（Tèt Kole）、パパイ農民運動（MPP）、パパイ農民運動国民議会、北東部地域コーディネーションとデッサリーヌ・ブリゲード（19世紀のハイチ独立運動のリーダーにちなんで命名）で、この連合が女性のリーダーシップ、先住民族、移民など食のシステムの周縁に置かれている人びとを重視して国際的な関係を築いていることも受賞の理由だった。2007年のハリケーンで破壊された環境を再生するために活動を始め、2010年の地震後は、貧困をなくし、ハイチの在来種を守るためにも活動している。3年前、MPPはモンサントからの遺伝子組み換え種子の寄付の申し出を、在来種を汚染しハイチの脆弱な食の主権を脅かすとして断っている。（Noticias Aliadas 06/09/2013より）

結婚を機にレコムの事務局長を引退して丸4年になります。今も運営委員ですが、四国の山奥に住み、嫁ぎ先が兼業農家というのもあって、あまり活動に参加できていません。お茶と千両（正月飾り）を生産していますが、特にお茶は価格の下落が止まらず紅茶加工に新たに組み組みたり試行錯誤です。高齢化・過疎化が進み、自治体（町）の高齢化率が50%を超えました。来年、家を建てる予定（＝永住決定）ですが、私があこの世に行く頃にはこの町はどうなっているのかとても不安です。その中でグアテマラで出会った、決して困難に屈することのない友人たちをいつも思い出します。レコムを含め、グアテマラを通じた出会いが精神的に大きな支えになっています。これからもその力の源であるグアテマラの人たちのために、日本でできることを続けていきたいです。

片岡（栗田）桂子

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、  
 発送は京都で 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)までアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| Vol.144 ブラジル・家族農業の危機   | Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力  |
| Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判 | Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性  |
| Vol.142 サパティスタの新しいサイクル | Vol.138 パナマ先住民族シガベ・ブグレ |
| Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪   | Vol.137 グアテマラ視察報告      |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

**レコム連絡先**

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>  
 88万3657円

<グアテマラ基金>  
 56万1459円  
 (2013年9月現在)